

土 淨

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月十八日 運輸省（特別徴収承認雜誌第三五二号）
昭和三十五年四月二十五日印刷 昭和三十五年五月一日発行

第二十六卷

第五号

五月号



田村円澄著（九州大学助教授）

法然

ほうねん

新書判・美本

定価二〇〇円

送料 二十四円

中 売 絶 賛

浄土宗の開祖法然は、日本仏教史の転回点に立つ聖者である。宗祖の立場は常に苦難の道であって、彼も例外ではない。しかし法然の門流が多くなるにつれて、法然像もまた神秘化され来った。本書はこの意味から在来の法然像のペエールを脱し、あるがままの人間法然を描き、執拗な弾圧に抗する苦悩と実践とを如実に追求した力篇。

東京都港区芝公園十九号地

申込先 浄土宗教化団中央本部

振替 東京 六一九三九番

浄土 五月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

議論……………川崎敬一……………(2)

大原の夜……………高橋良和……………(6)

救済……………木谷昭……………(26)

「どうしん」と云うこと……………純誉翠風……………(14)

身辺雑記⑤

中年の美しさ……………森赫子……………(12)

高僧伝福田行誠……………大橋俊雄……………(10)

法然上人の感化……………村上博了……………(8)

新編百喻経⑤……………伊東拳位……………(31)

信仰相談…………………………(24)

石川啄木(4)……………須藤隆仙……………(16)

扉の御法語……………五月の歳時記から……………(22)

童心仏心……………日常語化した仏教用語……………(23)

仏教習俗覚書(2)……………中村康隆……………(32)

―練供養と団扇まき―

浄
土

四月號

問ていはく、心のすむ時の念仏

と、妄心の中の念仏と、その勝劣

いかむ。答ていはく、その功德ひ

としくしてあへて差別なし。

法然上人御法語



議 論

川 崎 敬 一

くやしい話だが、ぼくは議論が不得意である。いつも防禦的立場にたたされてしまう。相手を自分のペー
スにまきこんで説得するなどという高等術策は到底、
ぼくの天性からは生まれてこないらしい。これは女房
が一番よく保証してくれる。

「あんたは、どうしてそうすぐ頭にきっちゃうの。ど
うしておだやかに話ができないの。あんたがね、大声
を挙げたら、私はもうこの議論は勝ったなと思ってい
るのよ」ヌケヌケとこういのである。一言や二言で
おしまいというのなら、ボロの出る余裕はないが、感
情が高ぶったり長々しい論争となると、もういけな

い。ぼくの頭のなかは、いつかは忽ち突風でも捲き上
ったような混乱に陥いり真空状態になってしまう。出
すべき言葉が見当らなくなってくるのである。もどか
しさと焦りで思考するゆとりを失い、セツパつまつて
手あたり次第の言葉を投げつけているという感じにな
る。そんなぼくが議論ではベテランという連中を相手
どって事もあるうに宗教論を戦わせたという嘘のよう
な本当の話を書こうというのである。

話の発端は三年ほど前に遡る。三年前のある夜、突
然三名の来訪者があらわれた。見るからに貫禄ある五
十がらみの男とこれもやはり年配の女二人。一面識な

い連中だったから怪訝な面持で玄関に出た私に、いきなり

「話を聞いていただきたいのです。お手間はとらせません。ここでは何だから奥にあがらせていただいて——」とかなんとかいって、ア然とするぼくを尻目に男はうしろの女を誘ってノコノコ上がろうというのである。度胆をぬかれたの何の。

「ここでは何だから」というのは常識的にいって、ぼくが言うセリフである。然し女房はこの連中を承知していたらしい。だからこうもナレナレしいのかと納得はしたが、なんとも不愉快だし、来訪の要領が得ないからイライラして狭い室で、ぼくは連中とダルマのように睨み合っていた。男は妙に落着きはらって服の内ポケットから一枚名刺をぬき出すとぼくの前に置いた。何とか株式会社の社長某とあった。社長の文字だけが白い紙のまん中から眼をむいているようであった。

「なんのご用でしょうか」ぼくは警戒的におずおずと訊いた。男は名刺が一応ぼくを圧迫したらしいことに満足した表情で、こうきり出した。

「あなた、インネンって知っていますか」

「インネン？ ああ因縁ですか。原因の因と縁起の縁、さあ、何かの以前の関係という意味のアレ」「そうです。そうです」男は頷いて「こう言っただけは何だが、お宅のご先祖は安じてあの世にいらしていませんよ」

生理的予感はずいぶん早かったが、意外に早く点火された感じであった。抑えつける余裕もなく忽ち突風が、ぼくの頭のなかにまき起った。

ぼくはあわてて訊いた。

「どうして、そんなことが分るんですか」

「病気が絶え間ないでしょう。不幸が続きますね。」

ご先祖がうかばれていないんですよ」

なるほど当時の女房は長い病気の連続だった。近在の医院はもとより大病院も数多く経て入院もし手術もやった。然し、なんでそれがご先祖云々と結びつくのだろうか。ムツとしたら思わず大声になった。

「随分失敬な言いがかりだな。そんな妙な因縁を考えるのは、あんた達の勝手だが、ここは私の家ですよ。然も初対面の当人の前でよくそんな言い方ができるな。一体、あなた達は何ですか」

「では単刀直入に申しませう。私達は××学会に

信仰をもつものです。お宅のような不幸を、ぜひお救いしたいと思ひましてね。信仰をおすすめにきたんです」オレはお前がそう呶鳴^{わめ}っても、こういうふう^{ふう}に穏やかなんだぞというように男はうすら^{わら}嗤^{わら}いをくずさず、クドクドと説きくどいて「——まあ、だまされたと思つて一度おやりになったら如何ですか。奥さんにもお話しましたが、病気がよくなり家のなか^{なか}が明るくなれば、それだけでも有難いんじゃないませんか」

××学会とは戦後おびただしく勃興した新興宗教の一つで、さかんに政治組織をひろめ昨年の参院選で二百五十万票を獲得したナン票、ハウレンゲイ票の政治宗教なんである。

「結論をさきにいうと、ぼくはキツパリお断りします。あなたがそれに信仰をもつことは自由ですよ。いまの日本は有難い自由の時代ですからね。然しそれは同時にぼく達にも自由はある訳なんだ。ぼくはね、あんた達が何といおうと、ぼくの父や母や祖先が持ちつづけ伝えつづけてくれた信仰を限りなく愛します。新聞や雑誌でも契約するんじゃないし、だまされた気で信仰するバカにはなれませんよ。あなた達は大いに信仰なさるがいい。無病息災で何十年でも何百年で

もお暮しになるがいい」

「自分だけがよくなればよいというのじゃ、この宗教はいけないのです。この有難さを多くの人に頒^わちあたえなけりゃ——」

「それが余計なおせっかいと言ふんです。むしろぼくはあなたに、そんな打算的な邪教はおやめなさいと言いたい位ですよ。然しそこは自由でしょうから、あなたの信仰の自由を尊重しているだけです」

「まあ、まあ、ゆっくり話し合ひましょう。あなた、随分、戦闘的^{せんとうてき}ですな——」

「戦闘的？　そうかな。ぼくはね、集会で戦陣訓^{せんじんくん}まがいのものを歌い、夜おそく大勢で他人の家におしかけるほど戦闘的^{せんとうてき}じゃないつもりです。あなたにゆくりされても、ぼくは忙しいし、第一、不愉快だ。ぼくにもう血圧をあげさせないでくださいよ。無病の宗教をすすめられて脳溢血^{のうえき}で死んだんじゃないや」

「でもねえ。奥さんの病気が治るだけでも、めっけものじゃありませんか。ねえ」

「ぼくはね、そういうものを狂信する余り病氣になつたり死んだという話はきくけれど、治つたなんて知らないな。然し、ぼくは思ふんですよ。病氣はしない

に越したことはないけれど、したっていいんですよ。人間は生身ですからね。病氣もします。死にもします。あなただって、そうリキんでいても、いつかはやがて死ぬ。それもあと百年とは経たんでしょ。うなあ。これは絶対の自信をもって予言できることなんだ」ここでぼくは良寛の言葉を思い出して、こうつけ加えてゐた。

「病氣をするのは信仰の不足だと歎くが、本当は病氣して当り前だ。病いする時節は病いするのがよく候です。打算ずくに信仰と因縁関係を求める氣持が邪よこしままだというんですよ」

というところで、この会話は打切ろう。男はもちろん、これで諦めた訳でなく、また、これしきでやめるような男でもなく、折伏セツボクとか称する精神的強迫の言葉は続くのであるがとにかく、ぼくはムキになって抵抗した。ひたすら抵抗することが、この際の絶対の責任でもあるように、仏とは、信仰とは、死とは、冥土あのよとは、果ては安国精神から栄養論まで延々三時間余の論争であつた。宗教論なんて全くシロウトのぼくが、よくもまあ。

流石に、この連中もほうほうの態で退散した。とぼ

くは思った。ところがである。それから幾日かして、こんどは壮士風の男、ついには警視庁警部というドえらい肩書の名刺をもった連中まで否応なしに入れかわり立ちかわり、いずれも申し合わせたように数名ずつきまつて夜の来訪である。最後の警部夫妻のときなどは、ぼくの余りの頑強さに、ついに相手も怒号を發した。ぼくは畳から飛び上がって椅子の上にデンと腰かけて大見得を切った一幕まであつて、今、思い出すと愉たのしくさえなるが、も早、予定の枚数をはるかに超えてしまっているので書けない。

そんなこんなで随分迷惑したが、よくよく考えてみたらやっぱり××学会だけはあつて、たった一つだが、ご利益はあつたようだった。否応なしの論争に、あれ以後、だいたい苦手の議論が上達したということである。

(学習院中等科教諭)

×

×

×

×

×

×

大原の夜



高橋良和

三月の末のそれも土曜日の夕方、ふと思いついて大原を訪ねた。

大原は京都から四里ぐらいはなれているいわゆる洛北の地であるが、京の名所が近代的なよそおいに変わっているときに、この大原の里は昔ながらのおもかげをつたえてくれているところである。

今は京都のまんなかゝらバスが絶えず往来しているのでこの里には市内と同じように、一時間ぐらいいで訪ねることが出来るのであるが、しばらく前までは八瀬から歩い

て行くより仕方がなかったのである。

然しこの大原の里には、あの荷物や、花を頭にのせて歩く大原女で知られているのであるが、この頃ではだんだんそういった姿の人たちが少なくなって、途中のバスの停留所で乗降する人たちのうち、若い娘さんはみんなハイヒール姿に変わってしまった。

八瀬から大原までの道は割合に広い川づたいの道である。花に早い時期であったから、訪ねる人も少く砂ほこりもなく好都合であったし、早や春のさきがけか、木々の枝にはふくらつばみのみえるものもあった。

大原についたのは丁度夕ぐれになったの

で三千院の門も深く閉ざされていたので、仕方なく附近の宿におちついた。

つばきの花であろう、うすぐらがりの玄関の横に咲いているのが目についた。出来るだけ静かな部屋に通してくださいと女中さんにたのむと、「へえへえ、今頃はどなたもお客がありませんからどうぞどの部屋でも静かですへ」といって一ばん奥の部屋に案内してくれた。

部屋は池に面した六帖の新しい部屋であったが、堀りこたつが丁度手ごろにあたゝかくてすぐさま足を突き込んだ。

三月であるというのにやっぱり洛北といわれるだけあって、京都市内より二、三度低いようであった。夜がふけると肌寒い感じになった。

女中さんといっても、もう六十七才だという老婆である。なりふりもかまわないが、どこか他の女中とちがうところがあるように思ってたづねてみたら、あにはからんや東京生れだということである。

「診らしいですな。東京からこの大原へ

ですか」

と、たずねてみると、口もとに笑みをたゝえながら、

「友だちのやっている旅館を手つだつていましたんどすけど、ついこの地がすきになりましたね、もう十四年にもなりましたよ」

と大原ことばにまじって、東京弁がときどきとび出してくる。

たのまれている脚本を書こうと思って、大原の里までやってきたのに、ついこの老女中に魅せられたのか、夕食を食べてからもこの女中さんと話し合った。

そして、三千院のこと寂光院のことなど古くからある大原につたえられるはなしをしていゝうちにだんだん夜がふけてきた。雨かなと思つて窓をあけてみると、梢を通して吹く風の音である。

はなしははずんでつきることを知らない。

そのときこの女中さんはふと勝林院のはなしをしてくれた。

わたしは勝林院につたえられる法然上人と顕真法師との問答のことは、何度も何度も勅修御伝をひもといたのでよく知っているが、今土地の人からその人の口を通してこのはなしを聞くと、いゝ知れぬなつかしさにうたれてしまった。

女中さんは更につゞけて

「この問答で念仏が、どんな宗旨よりよいことかわかったのですって、わたしも、こゝにきてこのはなしを聞いて、何度も勝林院の仏さまの前に坐りましたよ」

といいながらあとは口のなかで、ナムアミダブツとかすかにとなえているのであった。

そして、このあと

「熊谷はもし法然上人が問答で破れたら顕真法師を殺してやろうと思つて、ナタをもつてまちかまえていたのですって、それで法然上人がお勝ちになったのでそのナタがいらなくなったので、ナタを附近の竹藪にすてた、ナタすての藪が残ってますよ。」と、親切にはなししてくれたのである。

わたしは自分のよく知っているこのはなしを全くの浄土宗に無縁の人から聞いてゐる。なんだか自分の知っていることが更に証拠だてられたようにうれしかった。

そして大原の里に残る法然上人のはなしをそれからそれへとこの旅館の女中さんから聞いて、とてもたのしかった。

明日はいよいよ勝林院を訪ねて、丈六の仏さまの前に坐つて、静かに昔のあの大原問答の様子をしのびたいと思うのである。

そしてナタすての藪に残る熊谷のあの伝説のあとにも立ってみたいと思いつゝ、この女中さんと夜のふけるのを忘れて語りつづけたのだった。

脚本を書きに行つて脚本を一つも書かずこの老女中さんと一夜語りあかしたのは、日頃にないうれしいことであつた。

(筆者・日外日報参事)

× × ×

× × ×

兼実公の信仰 (2)

念仏の功德

村上博了

えぬ親しさ溢れるような温容であった。師の坊が筍子を指してニコニコとして何にか告げている。

二

月輪山荘は、兼実公の大愛好まれた山荘で、閑雅であり、風光も亦よいところであった。

月輪と云う名称は、和名抄を開いてその起りをたどるよりも、法然上人の和歌、

月影のいたらぬ里は なければども

眺むる人の ところにぞすむ

の月影と云うことと相似たところが多い。

月輪は稲荷山にかかる月景色を指しているよう。月に雲のかかる時、夕暮に霞たなびくその上に淡月のかかる時、溪川の水音は山にこだまして、一種の楽調となり、一幅の仙境が湧出する。

月は太陽に対してなくてはならぬ、憩のシンボルである。太陽が夫であれば、月は妻のようである。

なよなよとした楓の若葉は、日毎に変化する美しさ、つつじの花も緑りの葉を背景とした画のような美しさ、晩春から初夏にかけての風物詩である。

一

今しも月輪山荘に行く谷川にかかる土橋を渡って、竹やぶの筍子を指さして話合っている二人づれの僧侶がいる。やや後の方にさがって、かたい表情の老僧はお伴であろう、身の丈高く大きなからだ、いかつい張った肩や顔と云い目鼻立と云い、人一倍大きい作りである。殊に大きな目、目尻の切れ上った鋭さ、なにさま一かどの曲者と見える。

師の坊は中背小肥り慈光温顔なんともい

やがて元気な足どりで、小声にお念仏申しながら木かげを縫って行く。法然上人とお伴の熊谷蓮生であった。東山吉水禅坊からここまで約一里有半、いつも徒歩でおいでになられたのである。上人は仰々しい行列や駕はおこのみにならない、小鳥の声を友とし自然の風物を好かれた。この時、蓮生は強いてお伴をしたのである。上人はお伴の人選はせられない、気軽におでましになるのが通例であった。

三

上人は、月輪殿においてになり御休憩所で一息き入れられて、塵を払い清められ、公に導かれていつもの御座敷に赴かれる。

熊谷は、くつぬぎまでお伴する、彼は上人の後を見送って、縁に手をかけて、よりかかったまま耳をすます。

奥から御談義の音が、かすかにきかれる。よく聞きとりがたい。

この時彼は、大音を張りあげて、
「ああ娑婆、この世ほど、口おしいところはない、極楽には、かかる差別はあるまい。御談義の御声もきかれなければこそ」

と、はげしい声で叫んだのである。

極楽では、身分や性別に区別がない筈である。仏の説法もききたい時には自由にきくことが出来る。

ところが、この世はそうで無いとは洵に残念なことである。

戦場往来の破れかねのような大音声を耳にされた公は、

「あれは何者ですか」

と云われた。この時、上人は

「彼は熊谷入道と云い、武蔵国からきた、にわか弟子です。今日は是非とも伴をしないと、望んで参いました者です。」

と、答えられた。公は静かに、

「これへ」

と、申されたのであった。

そのお声に従って侍者の一人は立ってゆき、谷熊を請じたのである。熊谷は無言でそのあとについて、大床に座る、上人の説法を聞くことが出来た。

四

王朝時代、貴族と下人の区別ははっきりしていた。殊にお伴の者である、油断ならじとするが当然であろう。然るを「これへ」と召されたことは、曲者と見ない、信用している訳である。

上人のお伴と云うことで、疑われず又身分の上下を云われず、公たちと同席のもとに、共に有難く上人の伝化をうけることが出来た。

勅修御伝の著者舜昌の言ばを借りるなければ、

「往生極楽は当来の果報なをとをし、忽ち堂上をゆるされ、今生の果報を感じぬること、本願の念仏を行ぜずば、いかでか此式に及べき」と記されている。

念仏の行者である。仏さまからみる時には、ひとしく人間である。

もし本願の念仏を申しでないとしたならば、当来のこの果報はあり得ない。

念仏の功德は、忽ち堂上を許され、共に、阿弥陀經に説かれる俱会一処の功德を得たわけである。

熊谷はこのことを余測したわけではない、事実を事実として、この世の区別を大声としたものである。次第によっては、罰せられないものでもない、彼はその結果を考えなかったものらしい。そこに彼本来の氣一本無邪氣なところがある。信仰に徹した本當の念仏者であったことが判る。

「このことを伝えきいた世間の人々は耳目おどろきてぞ見えける」と云う。

公の度量宏大なことが知られる、上人に帰依した公のやさしさがにじみ出ている。



近代高僧伝

福田行誠伝

明治維新の仏教界にもたらした影響は、良きにつけあしきにつけ頗る大きなものがあつた。廃仏毀釈といい、教部省の発した三条の教則もそうなら、大教院を設けて神仏合併を企てたというが如き、新政府の宗教政策は全く狂態を極めたものであつたが、かかる中に於て悠容いささかも迫らず、堂々たる識見と人格とをもって、良く仏法の柱石として断固として、雄々しくも仏教界のために立ちあがつたのは福田行誠その人であつた。

彼は文化三年武蔵の豊島で生れたというが、父母の名はおろか、幼名さえも知るに由なく、出家の動機も伝えられていない。幼にして檀林小石川伝通院の伴頭寛淳のもとに養

われて受戒したが、学の研鑽に熱心な彼は長じて京都に遊び、嵯峨正定院の立道について習学し、再び伝通院に帰り、当時一山の学頭であつた鸞州に師事して宗学の奥底をききめ、俱舎唯識の秘奥をさぐつたけれども、更にあきたらずして当代唯一の天台の碩学東叡山浄名律院の慧澄の門を叩いて、天台及び俱舎を研究したという。慧澄は天台宗の人であつて、浄土宗門の人ではなかつたけれども博學無比、持戒堅固、学徳兼備の高僧として、行誠の慧澄に傾投すること頗る厚いものがあつたやうで、奇画珍籍を得れば必らず慧澄を訪ねて見せ、時に慧澄も其の訪づれを聞くや、欣然として出迎えたという程、両者共々

に尊敬しあい親交をかさねていた。行誠の名声日々に高く、伝通一山の衆徒は畏敬する青年学徒行誠について学ばんことを切望したので、求められるがままに講席を開くや、参集する学徒次第に多きを加へ席の空くことさえなく、この講筵は彼が処静院に移り、清浄心院に転住しても止まることなく続けられた。

処静院に住したのは天保十年十月のこと、浄土宗にも奉律寺院は数多あり、関東にも目黒長泉院や桑折の無能寺が存し、増上寺山内に慧照律院があるけれども、伝通院には準律を奉づる処静院はあつても本律道場はない。僧風次第にすたれんとする今必要なのは戒律であると深く心に思念するものがあり、山内処静院をもつて本律道場に改めんとし、行くゆくは仏法興隆を志す有為の律僧を養成せんとした。それには先づ指導者がなければならぬ。誰を指導者とすべきか。ここに白羽の矢は桑折無能寺琳堂に向けられ、琳堂のすすめにより、江戸にのぼり行誠の期待にそうべく東上し、戒律護持と仏教隆興のために一身をささげたのは祥堂琳端であつた。琳端は師行誠のすすめで慧澄に師事し、持戒堅固に修

行し、遂に安政四年行成るに及び処静院を本律道場と改め、自からは清浄心院に退き、琳端を後住としてすわらせたのであった。琳端こそ行誠の信望を一身にあつめ、勤王僧として山岡鉄舟や高橋泥舟・清川八郎とも交遊し、政局の安定を志して東奔西走、遂に凶刃にたおれた僧であったが、このように持戒清浄を基として、仏道本来の姿に立ち帰らせたいと念願する人であったればこそ、行誠は新政府によって明治五年四月太政官布告をもつて「自今僧侶の肉食妻帯勝手たるべき事」という告示の発せられるや、一には政府に建言して此の新令の取消しを乞い、又諸宗の大徳に示して持戒清浄三学精進ならんことを切に訴へ、筆をとっては「同徳論」「教法私批」「雪窓問答」をものすなどして、ありとあらゆる機会をとらえて、戒行のつつしむべきこと、就中肉食妻帯は僧侶本来の面目に違背するものであることを、教界に向かって極力説示したのであった。

又彼が檀徒を有する町寺——回向院の後住として入山をすすめられた時、極力これを固辞し、遂に檀徒こそつてのたつての望みであ

るとして、止むなく受諾されたとはいふものの、入山を固辞しつづけたのは「出家はもと一粒一銭もたぬが檀特山の芳跡なり」とする信念からであり、「寺持ち坊主は全体、根性のいやしきものにて、本堂の庫裡の再興のと名をつけて、蓄財するのを常識と心得たる」が故であるとするものであった。元来出家の資財は三宝物であり、その一分を僧侶の衣食にあてるのであって、飲酒非法のためにする資は一として存しない。従つて寺をもち、蓄財をもつとなれば、自然邪慾にかられることもあるであろう。ともすれば其れはとりもおさず破戒をおかすことにもなり兼ねない、それを恐れるからこそ寺はもちたくないというのが彼の本心であった。

こえて明治九年伝通院に転住し、更に同十二年増上寺にすすみ浄土宗東部管長となり、翌十三年大教正に補せられ、同十九年三月病を得て一時深川本誓寺に隠棲したが、偶々東西兩部制とこれにともなう宗制問題に端を發し、宗門が混乱状態におち入り、五大本山法主が辞職するという一大事が起つた時、宗門改革安定のため、推されて三十年四月徹底の

後をついで総本山知恩院門主となり、浄土一宗の管長に就任、祖風の宣揚につとめた。しかし在山僅か一ヶ年にして翌年四月廿五日病をおし、御忌を修し終るや、安堵と疲労もあったのであらうか、その日の正午寂然として浄土に旅立たれた。時に年八十三、法名を建蓮社立誓上人晋阿善奉行誠大和尚という。尚彼の在山中、二十一年一月病床にあつて伝宗伝戒の要領をのべられたものが「伝語」であり、三月稿り七月刊行されたが、これは後に大きな波紋えがき、論争のもとになった。

(大橋俊雄)

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

身

辺

雑

記

(五)

中年の美しさ



森

赫子

時候がよくなり若葉の風に誘われて出て来たのか、随分長い事御無沙汰していた友達、先日ひよっこり尋ねて来て、その時こんな事を話していました。

その友達の御主人は雑誌関係に務めているのですが、ノ切り間近になると仕事の都合で徹夜が続いたり、間に合わない原稿の為にいらしたり怒りっぽくなる事がよくあるそうです。そんな時、その友達はどうしていいのか判らなくなり、私に出来る事なら手伝うわよとか、少し位うまく行かなくも間に合えばいいんでしょう、とか云っている内に次第に御主人の気持に同化し

て感情的になり、遂に喧嘩になってしまふ始末だと云うのです。そこで或る日友達は、いくら自分が苛立って心配して見た処でたいした役にも立たない事だし、いっそ第三者のように静かにほって置く事にきめたそうです。弱った弱ったと何度も御主人の繰返す言葉を聞き乍ら、知らん顔している自分が、どうも少し冷めたくて薄情な氣もし乍ら、それでもじっと我慢してそ知らぬ顔をしていたそうです。

それから四、五日後、その仕事も片付いて御主人の云うには、いつもあんな時には静かに放つといってくれるのが、やっぱり一

扉の御法語

自信のない者はもちろんのこと、一応の自信があっても、いざとなると迷い悩むものです。上人のお詞を聞いて成程と思いながらもこんな時あんな時と迷ってしまい、上人の如く徹しきれるものではありません。

「念仏往生要義問答」は弟子たちの遠慮のない質問に、上人は実に明解を与えられたものです。この全文は是非座右におきたいものであります。念仏を申しながら、心のすむ時と、妄心のわき出る時とありますが、妄心の中でお念仏申したのでは功德もないと思いますがと質ねると、上人は「その功德ひとしくしてあへて差別なし」と答えられました。余りに明解なお答えなので、お弟子は重ねて質ねました。「心のすむ時のお念仏は、ただ極楽世界の莊嚴を想い、みだの本願だけが頭にあって、その他の雑多な考えもなし、純粹な氣持になれます。これに反して心が散乱している時にはいかに口だけがお念仏を唱えていようと、また手には念珠を持っていようと、心はどこかにとんで別のことを考えているし、目はそっぽを向いていることがあります

面白いね、苛ついたって仕方ない事位よく判っているんだが、切羽詰って来るとどうにも仕方がなくなるんだ。そんな時、君迄一諸になって苛立ったらよけい助からない。知らん顔してくれる方が、どうせ自分で処理するよりないんだと思って、甘えや依頼心がなくなるから、反って仕事が捗るんだ。と診らしく褒められたそうです。そこで友達は太いに悟ったらしく、近々に大学へ入学や就職を控えている子供達にも、母親の方が夢中になって騒ぎ廻るのはやめて、少し距離を置いた所から静かに眺めてやろうと決心したそうです。

私はこの話を聞き乍ら、四年前失明した時、どんなに心を尽して治療して下さった医師の力も、又どれ程心配してくれる廻りの人達の愛情も、なんの役にも立たなかった事を思い出していました。そんな時、どんなものにすがり甘えるよりも、自分の歩く人生は自分で責任を持つよりなかった事を、泌々と感じたのです。廻りの人達も自分、私自身の中から、それでも生きて行く

うとする気持の出て来る迄、静かに見守っているよりなかったに違いありません。

夏の海岸で、自分が夢中になって泳ぎ廻っている時には気のつかなかったいろいろな事が、離れて遠くから静かに眺めた時、反って全体の景色も泳いでいる人達の姿もはっきり眺められるように、距離を置いて眺めている静かな愛情も大切なものかもしれません。私はその友達が、以前逢った時より次第に年と共に成長して、美しさを増して来ているように思われました。

友達は又テーブルの上に出ていたゆで卵をもて遊び乍ら、「家庭にばかりいるとね、つい家庭の者の親しさから、二つの卵も一つのように考えてしまうのね。一人が怒るとみんなが怒る、困る時もみんな困る、それでは助け合う事が出来なくなってしまうわ」

私は窓から入って来る風を気持よく感じ乍ら、年を取る事が、けっして人間を醜くくして行くだけでない事を考えていました。

す。これ即ち不浄のお念仏であり、従って清浄のお念仏と不浄のお念仏と同じである筈がないではありませんか」これに上人は答えて「そのような疑問は、自分の智慧の上で判断するから生ずるのです。本願のほんとの意味が判っていないからです。あみだ仏は悪業を重ね、これに悩む衆生を救うために、生死の大海に救いの大船を浮べて下さったのです。これを例えれば重い石も軽いわらやむしろの類も同じ船にのせて運べば、同じように向い岸に着くようなものです。本願がいかに殊勝であるかということは、いかなる衆生も、賢者も愚者も、ただ名号を唱えるしか外に方法もなく、またお念仏を申せばかの岸にゆきつくというところにあるのです」と申されました。

この御法語に接して、こんなことを思います。つまりお弟子たちはお念仏を申しながらも清浄にし、専念して何ごとも余事を考えずにいたいと念願したのです。だからこそ少しでも妄心が生ずると、そのことによって悩み上人に教えを乞うたのです。上人はこうしたお弟子たちのひたむきな信仰を知っていたので、お念仏には清浄も不浄もその区別はないと答えられました。

『どうしん』と言ふこと



純 誉 翠 風

春の浅い信州の夜は沈々と更けて行く、梅や桜の便りもぼつぼつと聞かれようと言ふ今日、此の頃、気圧配置のいたずらから四月も真近いと言ふのに、陽気が狂い出し、殊に依ると零下に降る処も有るだろうと……余り有り難くもない御託宜、外は滅法寒い、未だ夕食前の体だけれども……おなかの空いた事より暖かい部屋が快い……妻は瞳をあげて僕の、さも……非行でも詰じる様な眼をし乍ら、『おそいのね……お夕食は』と言った。僕は決まったことを……と言った様な口吻で勿論末ださ……何しろ編輯会議が手間取っちゃってね……勿論ファイトにもえている吾々のことだもの……老僧達は

頭が古いだろう、封建的のこちこちだろうその人々の先頭に立って時代の尖端を切り、頭迷な人々を覚醒させようと言ふこれが俺達のモットーさ妻も姑達もニヤニヤし乍ら聞き入っている。舅は聞こえて居るのか居ないのか苜を燐ゆらし乍らこれもニヤニヤしている。

妻はお勝手に立って行った……そして何かごととやり乍ら準備をして居るらしい。僕は何んとなしに愉快になって了って何か歌わずには居れなくなった。ハミングで何かやっている所へ夕食が間に合ったらしく、妻が運んで呉れたほかほか湯毛のたつうどん……その厚意を謝し眼に物言わせて視線の合った時、妻はニット微笑んだ。小柄な逞ましい頸筋のあたり……ほつれた毛のかかる頬の当りがいちら

しい。『貴男みちどころって何んなの……印刷所へ廻す原稿を見て妻が言った……』

僕は情なくなった。女って言うものは割合に教育もないし、常識の発達して居ないのに屹驚した……それで居て言うだけの小理屈はこねる……何か気に入らたい時は河豚の様によ……とふくれる……。

それはみちどころと読んでも間違いぢやないけれど『どうしん』と音で読んで欲しいなあ、『どうしん』のどうは『道』と書くけれどその道には深い意味があるんだよ……道には狭いものもある……広く坦々たるものもある……、曲りくねったそれもあることと思う……然しだねここで言う『道』とは前途に幾多の困難のある迂余曲折に富んだそれであろうと思ふ。然しだよ……前途に横たわる難関を考える時、その時こそ僕達のいや男としてのファイトがもりもりと燃えると言うものぢやないか……こうした同人雑誌も龍頭陀尾に終る様なことはしたくはないよ『道』そのものの言葉の中には孔子聖人の言われた精神も含まれても居よう……然しだよ君……人間の踏み行ふ可き道

義というか……そう言った定義は多分に含まれてはいるさ、明治天皇の詠まれたと言う『梁伝う鼠の道も道なれど誠の道ぞ人の行く道』の誠の道……その意味より寧ろ僕等仏教徒いや青年仏教徒としては現代に於て斯く有る可し……斯く有りたし、この精神を検討しようと言う精神にはかならないんだよ……妻も姑も煙に巻かれて眼をばちくりしている……舅のみ我が意を得た様な顔をしてニヤリとした……然しこの老僧も畢竟世の老僧の域を脱して居ない……これまでの仏教はいや今の仏教には格別そうしたことも言えると思う……日々新興宗教に蝨食され乍ら古い伝統の殻に閉ぢこもっている……そして徒らに未来を説きお浄土を説いている……それも悪くはないさ……然しだよ……時代に取り残こされて葬式坊主にもなり下がるのは和尚の本分ではないよ……そうだろう……妻がこの時口をはさんだ『貴男……お説は極結構よ……うどんが伸びて了うから、一応……おあがりになってからにして頂戴……』僕は持論の佳境に入った話の出鼻を挫かれた腹癒せにその井を傍によせて……

今の仏教は……いや宗教は切口から赤い暖い血の滴るものでなくてはならないと思うんだよ……失礼な申し分かも知れないが御老人は先の短い消耗品だよ……お説教もいやと言う程聞いた善知識だよ……そうしたお人を相手にして、対象とするよりむしろ伸び育んで行こうとする幼児を相手にして掛からなけりやならないと思うんだよ……新興宗教につけ込まれるには確かにつけ込めるだけの隙があつたに相違ない……寺と檀信徒がガッチリ組むスクラムにはそうしたものが入り込む隙がないよ……今の時代に逢う様話を進めて行くことも勿論必要さ……然しそれには自然科学の、哲学の裏附けがなければならぬそれだけ学問の必要を痛感する。然し……それも純心な、天心無垢な童心……更にいうならば胎児の時から既に宗教教育の必要は充分にあると思う……その時代時代に、時には反逆し乍らも愛される、親しまれる宗教でなければならぬ……それには、当然先づ第一に理解を必要とする……法然上人の御開宗当時も……或いは当時の既成仏教からは異端視もされたろう……然し当時の人心にマッ

チした理論と火と燃える求道精神、フアイトが実を結んで今日の隆盛を見た……そうも言えるのさ……今の或る教えの様に排他的であることは、人心から嫌われる第一条件だね……清濁併せ呑む……大乘精神……これが何時の時代でも必要欠く可からざるものだと思うよ……宗祖が、或いは親鸞が今日の吾々の様に殿堂に安住せず、草庵に起居なさり、それをフルに活用され、寧ろ樹下石上を道場として布教された御精神を考える時、僕はこの殿堂を、あらゆる面に活用し利用しなけりや済まないと思うよ、供し、機会を囚えて人心に喰い込んで行く……これが大いに必要だと思ふな……斯う考えて来るとフアイトがもりもり湧いて来るよ……僕は炬燵の上の冷えたお茶をガブリと呑んだ……『貴男……それは……』と言って茶を替やうとする妻の手と宙でからみ合った……姑はいびき声を立てて舟を漕でいる……舅は……と見てあれば黙して語らず新聞に見入っている……次の間の時計がポーンポーンと鈍く九時を打った。

おわり

石川啄木④

——法然へ還る道——



仙 隆 藤 須

無宗教主義者として

「その昔、聖霊の住家であつた教会には、
今牧師といふ商人の家族が住んで居る」

(39、3、27、日記)

「宗教家は心の糧の乞食」(40、6、10、紅
苜蓿の中の一節)

啄木の無神論は遂にこのような既存宗教家
への痛罵から始まるのである。

その前に述べておかねばならぬことは、彼
の無宗教への豹変は、明治四十年(二十二才)
を境として以後明瞭になるということであ
る。これ迄は十六、七才頃の西洋神的時代、
十八、九才頃の樗牛時代、二十、二十一才頃
の宗教より突放されたる時代、と順次に移
してきているのであるが、二十二才以後は全
く一貫して無宗教の時代となるのである。

これには勿論理由がある。

二十才、父の宝徳寺事件で盛岡に帰ってよ
り、明治三十九年(二十一才)には浜民小学
校の代用教員となり、そして次の年には校長
排斥運動に関係して学校を追われているの
である。「石をもて追はるごとく」、あの有

名な歌の如く、この年の五月に北海道へ渡つ
たのであり、以来、函館での代用教員、札
幌、小樽、釧路での新聞記者生活、そして明
治四十一年(二十三才)には東京に上り、二
十七才死ぬまであの極貧の生活が続けられ
るのである。

もともと彼は経済的に恵まれていなかった。
中学五年、もう卒業というのに「血に染
めし歌をわが世のなごりにて、さすらひこ
に野に叫ぶ秋」の歌を残して退学し上京した
のも、家計がそれ以上の進学を許さなかつた
からであるといわれ(石川正雄氏説)、加え
て父の宝徳寺追放事件、代用教員の薄給と、
更に彼自身学校を追われるという悲運、そし
て函館で再び弥生小学校の代用教員となつた
のも束の間函館は大火のために学校も焼け、
糊口の目標がなくなり、後はさいはての地で
の新聞記者生活が続くのである。

後年の彼が社会主義者であつたことは周知
の如くであるが、宮崎郁雨氏は恵まれない彼
について「文学と生活の統一が出来なかつた
ために生じた破綻と悲劇の責は勿論彼自身が
負うべきであろうが、然し少なくともその一

半は矛盾と撞着に満ちて居る社会がそれを負わなければならぬものだろう。啄木がその後幾何もなくして虚無を信じ社会主義に傾倒する様になったのも当然の成行ではなかったろうか」と述べているのである（函館落ちした啄木」読本）。

今彼の生涯の出来事を詳しく述べる余裕は勿論ないが、とにかく浪民を追われて以後、彼の思想が社会主義へと傾いていったことは無理からぬことであって、それがために彼の文学は驟然新しい方向へと動き出したのであるが、宗教の問題に於ても、いわゆる明治四十年の函館落ちが重大な転機となったのである。ここに同年を境界として無神論の明瞭に打出された理由も存するのである。

但し、このような客観的条件こそ彼を無宗教にしたのであり、それは私が述べてきた如き彼の宗教思想の変移と一応別の問題である、と見る向きもあるかと思うが、しかし私はこれを別個の事実とは見ないのである。

勿論宮崎氏の指摘する通り、社会環境による彼の思想の変化は充分認められこそするが、このような状態に遭遇した彼が、突然無

宗教の厳しいものを打出したということは、これまでの彼の宗教思想そのものにも又当然そうなるべき要因が含まれていたのであって、私が問題としているのは、その点であり換言すれば樗牛時代の彼が、僅か二三年の間に徹底したる無宗教主義者になったということとは、それだけ過去の宗教思想が危険の要素を含んでいるものであった。ということになるのである、むしろ先述の如き社会的条件がかりになかったとしても、彼の無宗教への道は必然的のものであったであろうとさえ考えられるのである。

ただそのような彼と宗教の問題に於ける必然性の上に、浪民の石をもって追われる如き北海道への流浪は、一層その必然性を早き現実化へと導いたのであり、「神は遂に知るを得べからずして唯感すべきのみ」（主筆江東氏を送る）という神の自己自身への消去は「宗教と哲学とありて果して幾分の混乱をか比人生より感じ得たる」（41、2、釧路新聞『卓上一枚』）という宗教そのものへの無力さを感じする結果となって現れ始めたのである。

それでも流石に明治四十一年二月六日釧路で石原即聞の『仏教哲学汎論』を買っているが、同月八日宮崎氏に宛てた手紙の中では次の如く叫んでいるのである。

「現時に於ける宗教の頹廃を以て、人間―信者―の墮落に帰するのは飛んでもない間違だ。靈魂と肉体とを別にした一切の宗教が自意識の発達した時代に存在し得る理由がないのだ（中略）少なくとも僕の目には道德などといふものはない。自他融合の意志と僕の名づくる愛はあるが、道德は無い。既に靈肉の區別がなくなって、勝手になれと虚無の宣告を受けた人間にとっては、万事唯勝手になればよい。君實際現在の僕の、底の底の思想程明白な赤裸々な思想はないだらう。人の前では云はれぬが、僕は×××××だ。無宗教だ。うまい物は喰ふべく、うまい酒は飲むべし、流石にまだ実行した事はないが、本然の要求に基く際に肉慾の如きも決して罪惡でも何でもあるまいと理窟から考へて居る」

又、同年四月釧路をすてて上京、小説を書いたりしたが稿料が入らず、七月には自殺を考えるなど全く苦悶の生活であったが、その

七月七日岩崎正氏へ宛てた手紙の中に次の如く記している。

「兎に角人生は苦痛だ。神など無論無い。靈魂もない。あるのは永劫不変の性格の根のみだ。それが何よりの苦しみだ。そして君人間も遂に動物だ。上等下等の階級はあるが、矢張動物だよ。無いと信ずる神といふものに祈ってみたい様な心地さへする。泣かず笑はざる真面目の苦痛（中略）

君、僕の現在かく生きてゐる唯一つの理由——自分でこしらへた理由は、人間はその一生のうちに、最も大胆に、最も露骨に、最も深く、最も広く人生一切の悲喜哀樂のすべてを味って——理智では知る事の出来ぬ人生の真の面目を實地に味ひつくして、そして死ぬ人が「真の人間」——英雄だ——少くとも僕の理想だといふ。苦しい苦しい覚悟唯一つ、何事も知らなくともよい。総てを味つてみたい。刹那々々をも無為に過ぎずに、深く広く一切の人生の苦痛と歡樂を味ひたい。無信仰だ。無道德だ」

前の宮崎氏へのものの中には、やはり「自我融合の意志」という言葉が出てくる。しか

しそれはもはや先の宗教思想の上に現れていた同語とは完全に意を異にしている。それは次の岩崎氏への手紙の中に語られている「永劫不変の性格の根」という言葉に表現せられるものであつて、いい変えれば一切の他を許すことのない強い自我そのものである。靈魂と肉体とを区別した宗教なんて存在するわけがない、といっている。

ここにもこれまでの彼の宗教観が如何に観念的なものであつたかが如実に語られているのである。これまでのものは実に立派な宗教論ではあつたが本物ではなかつたのである。そしてここで『虚無』という言葉が出てくるのである。『×××××だ』という伏字の部分は私にはわからない。しかし前後の文脈から推して『刹那主義者』とでも考えるべきであらうか。いずれにしても自信家の彼が親しい宮崎氏にすら伏字したのであるから、宮崎氏には解得されていたであらうが、良い意味のものではなかつたであらうし、彼自身、末だ明瞭に公言するには幾分の良心が咎めるものだったのであらう。岩崎氏へのものになると、この線がもっとはつきりしてくる。刹那

主義も明瞭になるし、神も靈魂もない、神無論が明確化されて、それでも「無いと信ずる神といふものに祈ってみたい様な心地さへする」と訴えているところは注目すべき点である。

こうして自づから虚無の宣告を下した啄木はその行動も勿論正常なものではなかつた。明治四十一年六月七日の日記には次のようなことを記して痛快がつている。

「救世軍が何か頻りに喋つてゐる、と其群集の中から吉井勇君が出て来た。吉井君が眞を喫んだのを攻撃したから、ウント喫んでやつたとの事」

又、同七月十日の日記には、キリスト教の伝道隊が説教を始めたのを、啄木と吉井勇と二人で、聴衆の中に女を探しながら、ふざけはんぶんて聞いており、博愛を説いたのに対して、

「オイ吉井君、博く女を愛する事についていや僕だって神様に負けないよ」「敢て劣らずか、僕らも半分位神様だね」といって二人は群を離れたと記している。

先にも述べた如く宗教に対する唯物論的批



(小樽公園の啄木歌碑)

判は主にキリスト教を表面立てている。「いかめしい教会が到る処に立てられて宗教の真の信仰が段々死んだではないか」(39、3、8、日記)といい、クリスチャンになった妹についても「最後に妹は神を求めた。否恐らくは神によって職業を求めた。光子は今冷やかな外国婦人の許に養われて、神のために働いている。来年は試験を受けて名古屋のミッションスクールへ入り一生を神に捧げて伝道

婦になると云う。兄に似た妹は果して宗教家に適しているだろうか……(42、4、18、日記)と記している。更に死ぬ前年の明治四十四年十一月十日の日記には、ミスサンダーという四十位の女「こなれない日本語で熱心にキリスト教の事を説いた。面白くもあつたし、可笑しくもあつた」と記している。

神ありと言ひ張る友を説きふせ、かの路傍の栗の樹の下(一握の砂)

クリストを人なりといへば妹の、眼がかなしくもわれをあはれむ(悲しき玩具)そして右の如く歌の中にもその思想は散見されるのである。

啄木の宗教観

さて以上極めて粗雑な手法であつたが、私は啄木に関する宗教との問題に於て、でき得る限りの資料を供じて、彼の宗教思想、論、その変移、等を述べてみたつもりである。

勿論幼稚な論述ではあるが、それでもここに一応、彼の宗教観ともいふべきものを纏めてみる事ができたように思われるのである。そこで今更に幾らかの資料を加えて結論的にもう一度彼の宗教との問題を通瞥してみると、次の如くなるのである。

十六、七才頃の彼は多少、西洋的神、キリスト教的神に関心をもっていたようである。バイブルも読んだようだし、進歩的思想を負する少年啄木にあつて、それは当然のことだったであろう。

十八、九才の頃は樗牛等の宗教思想に影響され、新しい宗教思想と、日蓮や法華経に関

心をもった時代である。天台や禪の思想に幾分なりとも関心を示したのもこの時代であつて、この頃は宗教に関心をもつことにおいて、自分自身、乃至は自分の生命とする詩の世界に絶対の信を抱くことができたようである。そして二十才の頃には「靈あるものは靈に感応す」なる公表論文まで発表するほど宗教を直接のものとしていたのであるが、遂にこれを頂上として今度は、逆に宗教の世界から降りてくる彼となるのである。即ち二十才二十一才は宗教から離れてゆく過渡期に立せられるのであつて、

二十才以後は遂に無神論、無宗教を宣言する彼となつてしまふのである。

この間に於ける彼の自我の強烈、乃至は社会的条件の不遇は既述の通りである。

しかし是非附言しておかねばならず、又これこそ本主題の重要点であるところのものは、彼が無神論、無宗教、と自から宣言しながら、又それらしき行動にも出てみながら、実は決して完全なる無神論者、無宗教主義者ではなかつた、ということなのである。このことは今日まで恐らく無神論、無宗教、と自

称する總べての人達にもあてはまることと思われるが、それはそれとして、彼の場合には明らかに完全な無神論者、無宗教者ではなかつた、ということがいい切れるように思われるのである。否そういう曖昧な表現を用いなくとも、私はそう断言して私なりの考えとするものなのである。

先にも注意した如く、「無いと信ずる神といふものに祈つてみたい様な心地さへする」この啄木の告白は重大である。

私がいま、彼を完全なる無神論者、無宗教主義者ではない、と極論するのも、ここに重大な鍵があるのである。それは簡単な、何等深い意味をもたない、少くとも思想の上に極め手となる程重大な言葉ではないように一見思われもするが、しかしそれでは余りにも彼の總体を見尽していないように思われるのである。

一体彼が、無宗教、無神論、ということに到達したのは、彼自身の思想、特に宗教に関する思想の中に充分の原因があつてのことである。そのことを縷々述べてきたのでもあるが、その原因の最も大きなものは、彼の自我

意識である。自我意識の強大は遂に彼をして、この無神論の極にまで到達せしめたのである。

しかし反面彼は決して一つの処に停滯している人間ではなかつたのである。不斷に進み不斷に流動していく、やはり平凡ではない、最も進みの激しい秀才だったのであり、したがって自我の強大も、遂にはその極に達すれば、次に來たるべき問題へと当然移行されていったのである。

いいかえれば、宗教も道德も一切を否定してしまつた彼に、唯一つだけ残された「永劫不変の性格の根」。この否定することのできない自分自身の「性格の根」ここから彼の思想は、又もや新しい方面へと展開せざるを得なくなつていったのである。

つまり、一切を否定して、そこに唯独りだけ否定することのできない自分の存在、その自分が、これ又どうにもならない虚無そのままの自分、最も大胆に、最も露骨に、最も深く、最も広く、人生一切の悲喜哀樂のすべてを味つて、そして死ぬ、という、自分でも自分にブレーキをかけることのできない、勝手に

奔放の自分、唯無茶苦茶に無闇やたらに悲喜哀樂の中を駆けめぐる自分。

強烈にしてむしろ最大なほど自我意識を高められた彼は、この虚無な自分に最後の実存を見出した時、そこに始めて、無いと信ずる神にさえ祈ってみたい、という、これまでとは逆の、今度は更に「宗教に向っていく心」というものの芽生えを見たのである。

それは勿論、二十才以前に於ける「宗教への向い方」とは全く別のものであり、一度宗教へ向った心が、見事に壊されて、次には宗教へ背向けの道を辿り、そして再び背向けの自分が、新しい宗教への道に向いつつある、という、極めて逆説的な心の芽生えだったのである。

もっとも彼自身は、この第二度目の宗教への道とでもいうべきものを、一步も進むこと能わず、僅かにその門の前迄来ていると思われるところで死んでしまうのである。そのことは後の筆にまかせるが、とにかく無宗教、無神論、といった彼の心の中には、第二段階の宗教へ向う心が芽生えていたのであり、私は先の「無いと信ずる神」云々の言葉も、こ

のような観点から重大、と着想するのであり、完全なる無宗教主義者ではない、という論断も、ここに根を求むるものなのである。ここでは是非加えておかねばならぬことがある。それは悲しき玩具の中に収められている次の如き歌である。

神様と議論して泣きし夢を見ぬ、

四日ばかりも前の朝なりし。

この歌は明治四十四年彼二十六才、即ち死ぬ前年の二月、慢性腹膜炎で東京大学病院へ入院中の作であることが「郁雨に与ふ」という一文によって知られる。同文によれば腹膜炎で苦痛の最中夢を見たというのである。それは神様と議論した夢であって、神様と議論して啄木は遂に泣き出してしまった。しまいには神様は「もうよしよし」と小学校の先生のように頭をなでてくれる。啄木は「私の求むるものは合理的な生活であります。ただ理性のみひとり命令権を有する所の生活であります」と何度も神様にいったことを覚えていたという。目がさめたらグッシヨリ汗が出ていた、と記している。そしてこの歌が生れたものであるらしい。

私はこの歌を見る時、そしてこの歌が出てきた原因を知る時、彼の心の中の第二段階の「宗教へ向う心」というものを一層明瞭に看取することができるのである。恐らくこれは他の総べての人々にも解して頂ける事柄ではなからうか。

十六才頃の彼から死ぬ二十七才までの彼にあって、二十二才以後の満六年間、つまり彼の思想を問題とし得る時代の約半分は、表面上無神論、無宗教、ということになっているのである。だが実はそうではないのである。

もし彼の宗教を論じて、単に「無宗教」といい、あるいは宗教的なものから次第に離れて遂に無宗教になって終った、とのみ説く人があるなら、私は、それは甚だ浅い彼に対する宗教上の観方とより思わないのである。

無宗教とされる六年間は、実はその底に、これまでとは異った、もっと真摯なる「宗教への新方向」があるのであって、彼は無宗教で終ったのではなく、新しい、本当の宗教への芽生えを見、その結実を見ずして夭折したものと見て、彼こそ真に宗教の真髄に向わずにはいらなかった人の一人、と信ずる。

(未完)

「十年一昔^{ひとむかし}」という言葉がある。目まぐ

るしい都会のただずまいと異って、千週一
律の梯を持つ田舎の生活も、環境も、十年
乃至十五年過ぎると、流石変化に乏しい田
舎のただずまいも多少変って来る。然し此
の節、ミサイルも飛ぶ時代、マスコミの時
代としては、寧ろ五年一昔^{ひとむかし}の感なきを得な
い。「親の脛^{かじ}を噛^かって居る時代が一番なつ
かしい一番幸福^{しあわせ}だ……」この言

葉を屢々耳にすることがあ

る。けれども……考えて見れば

その時代は一番夢も多く又責

任のない時代でもある。私達

がそうしたことを述懐するのはそれだけ

「その頃の夢を追う」とも言われようが：

多少その言葉の中に「悔い」がないとは言

い切れない。多分に未練^{みれん}がましい。残滓^{ざんさい}がな

いとは言えないと思う。

人生は苦の連続だとも言われ、仏教が限

りない欲望からの脱脚、その制禦である

とするならばその理想郷は欲望のない、閑

争のない世界であるに相違ない。阿弥陀^{あみだ}經

には衆^{もろもろ}の苦有ることなく但諸^{ただ}の楽しみのみ

を受く故に極楽と名附くと説かれて居る。

一日^{いつじつ}はメーデーの日である。此の日は労働

者に取っては天国でもあろうけれども……見

方に依っては労資間に取っては、血みどろ

な争闘の日でもある……斯様に争いを標榜す

る反面、八日には「母の日」としてカーネ

章の定められたことは、児童の権限と自由

を認め、これを保護しようと言う事も意義

が深い。然し……それが理想通りに行われ実

施されて居るならば文句はないのであるが

……釈尊はものの生命を尚^{しょう}ばれ、愛された方

でもある真の自由を翼^{こいねが}い希望するために

も釈尊降誕会がもっともっと盛大になつて

行く事を希望するものである。

近頃欧米思想^{おうせいしゆ}謳歌、崇拜、

乃至私淑するの余り昭和〇年

と元号を用うるよりむしろ西

紀毫千九百××年などと記す

カレンダーが多く巷^{ちまた}に氾濫

し、迷信の二字に片づけて十二支やら大

安、友引などの事が記してない現状や、十

二月廿五日をクリスマスイヴとして讃嘆す

る狂態を信徒の一人として苦々^{にくにく}しく想うの

は私一人ではあるまいと思う。

ある。そうした意味から十五日を体育デー

として制定されたことも意味深い事であ

る。五日を子供の日として制定され児童憲

「五月歳時記から」



(大久保学随)

仏教が日本に伝ってから既に千数百年もたつ、したがって、仏教が血となり肉となつて、われわれの生活を豊かにしている。それだけ現在の我々は知らず知らずの内に仏教の言葉を使っている。

日本文化向上に千年以上の歴史をもつ仏教用の中から、日常語化したものを二三ひろって記して見ることにする。

あ ま

「おかあさん」と云う呼びかけの言葉があるが、これを印度古代では「アンマ」とか「アンパ」とか云っていた。

(梵語 Amba ^{パール} = 語 Amma)

これが日本にはいつて宮様御公様卿方の母の呼かけに「おあま様」なまって「おもう様」となったのである。父の呼かけの「おたあ様」は「おたた様」から変つたので梵語の「タータ」(Tata)である。

一面母の呼びかけの言葉から「女」の意味に用いられ、更には出家の女子を「尼」と呼ぶようになり、俗用して海女、^{アマ}「アマッコ」も生れるに至った。

いんねん

因縁をつけるなぞと用いられたり、又何か悪いことがおこるとこれも前世の因縁だと云う。しかしこれは悪いときばかりに用いることばではない。もともと因は因果の因で、結果に対する原因である。縁は結果に導びく環境即ち種々なる力である。例えば米粒だけでは稲にならないがお百姓の種々なる努力、土地、太陽、肥料其の他の力

日常消化した仏教用語



によって稲となるのでこれが縁である。

おしやか

工員仲間の用ふる言葉で、不良品をつくった時、それを「おしやかにした」と云う。なぜ不良品を「おしやか」と云うのであろうか。これはお釈迦であつて、私達が見つけているお釈迦様の姿は四月八日花まつりの時の童形立像か、二月十五日涅槃会のおなくなりになったお釈迦様をかこんで

多くの弟子等鳥獸に至るまで集り来り泣き

悲しんでいる絵である。この涅槃像からの連想で、不良品を作ればその材料はねてしまふ。ねているお釈迦様から、ねたものを「おしやか」と呼ぶようになった。一種の隠語で関東地方では相当古くから広い範囲に用いられている。このように目に見た形の連想から来たものに寿司屋の用語の「しやり」がある。しやりは舍利であつて、仏様のお舍利と寿司のどはんとの形、色の類似から、このどはんを「しやり」と云うのである。戦争中黒い米ばかり

で、真白につきあげた米が少なかった時、真白などはんを特に「銀しやり」と云うことばさえ作られた。

ちゃぶ台

禅宗でよく用いた普茶料理、これが民間にも流行し、その器をのせる台が普茶台である。これが「ちゃぶ台」となまつたので茶釜を「ちゃまが」と云うのと同様である。

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

神経症からぬけ出すにはどうすればよいでしょうか。

—おたずね—

突然粗書を奉って勝手なお願いを致しまして本当にすみません。実は、私は当年満三十六歳（大正十三年生）にもなりながら、神経症のため独身で暮している農夫なのであります。神経症といっても色々ありますが、私は対人関係のものにて、強迫観念もあります。くわしく申しますと長文になるのでやめますが、今迄、色々の専門学者や斯界の大家に世話になりましたが、思うようになりません。この上は催眠分析でもして貰おうかと思いますが、これも容易でないのです。

或人のいい分では、日蓮宗の中には修業が充分積んだ結果、常識にてはわからぬこともわかるような、即ち大変に霊眼の開けている人がいるから、そのような人について貰ったらといって下れます。しかし私は田舎者で、殊に宗教のことは知らぬので、修業の結果偉大なる霊力を具えたような方は不幸にして知りませんので、別に何宗でも結構ですから、そのような方を御承知でしたら、お名前とお住所をお教え仰げぬでしょうか。また、このようなこと、即ち修業の結果霊力を獲得具有出来るということについて、何卒御忌憚のない御高見を拝し奉りたく在じます。

宗教は哲学ではありませんから、学問と同様に業をつみ、実践性を必要とする存じます。霊眼により霊視するなどは、一面非科学的のようながら、宗教は何宗に限らず「信」ということが大切に、理論のみ

で割り切れるものではないと存じます。その観点から、生涯をかけての精進によって不壊金剛の精神を得ることが出来ると存じますが、いかがでしょうか。（和歌山県、田辺市、中田喜久、卅六歳、農業）

信仰は病気なおしではなく、安心という目的地につく為のものです。

—お 答 え—

あなたは「宗教のことは何も知らぬ」といっておいですが、仲々どうして、立派な信念をお持ちです。確かに、修業を積み、常人に分らぬことでも分るようになります。禅の悟りもそうです。念仏三昧に入っで見仏するのもその一つです。世間ではこうした現象を不可思議なこととして、もてはやします。しかし、本当の仏教では、こうしたことは、いわば「おまけ」みたいなものとして、余り重要視せぬどころか、かえって、こうしたことに興味をひかれて

真実の修業の邪魔になるとしております。

例えて申しますと、汽車にのって旅行をしている人が、目的地へつく前に、窓から見る風景にひかされて、途中下車をしてしまふようなものです。「悟り」という目的地を忘れて「不可思議」という風景に心が奪われてしまうのです。なるほど、汽車にのって旅をしておれば、時には、素晴らしい景色も見られるでしょう。それはそれとして、美しい景色としてみればよいので、これにこだわると、肝心の目的地に行きつくことが出来なくなります。このところをよくわきまえておいて下さい。

そこで、あなたの神経症のことですが、神経症というのは文字通り神経の病いです。中には肉体的な欠陥から来るものもありますし、病菌によるものもありますが、そうでないものは純粹に「精神的」な原因によるものです。所謂「心因神経症」と呼ばれるもので、大概の場合これが多いようです。こうした「心因性」のものは、結局その人自身の心の持ち方のいかんでよくな

れます。無論、そこには必ず何か「心理的原因」はあります。あなたの場合は「対人恐怖症」または「赤面恐怖症」です。これは非常に多い病気——病気とはいえぬほど多い——です。その原因は色々ありますが、詮じつめると「何か自分にひけ目を感じている」にちがいありません。近頃よくいわれる「劣等感」があるのです。一人子で小さい時から家の者と文けしか交渉をもたぬとか、身体の一部に何か欠陥があるとか必ず何か原因がある筈です。あなたも、ただ病気そのものだけにこだわらずに、静かに自分の今までの生活をふりかえって御覧になつたらよいと思います。そして、自分として一番の欠点、弱所が何であるかを見究めて、それを逆に引きのばすようにしてみることです。天才とか偉大とかいわれる人が、常人と異なる最大のちがいは、自分の欠点をよくわきまえて、逆にこれをのばすか。これを克服するということでしかありません。俳句で有名な加賀の千代は、大変肥った人で、他人からそのことをいわれた時

一かかえあれど柳は柳かな

と詠んだそうです。トルストイは有名な悪筆で、彼の書いた原稿の字は彼の妻にしか読めなかったといわれます。どうぞ、あなたも、対人恐怖の原因が自分の欠点——それはあなた自身がそう感じているだけなのですが——にあることを認識して、これをのり越えるべく努力して下さい。

そのために、自分の力だけで自信を持てぬなら、仏教の信仰の力を借りることも結構ですが、前にも申したように、信仰というものはもっと大きな目的のもとに抱くもので、単に神経症をなおすために信ずるというのであってはなりません。このところをくりかえして申し上げます。信仰の修行は病気なおしという風景にあるのではなく、大悟、安心という目的地につくことなのです。

「仏道に不思議なし」といわれますように、不思議を求めて仏教に入ってもそれは無駄です。逆に、心不乱に仏道をつきすすめば、自然に不可思議の風光が現前して来るのです。結果と集団をとりちがえないで下さい。

救 済



木 谷 昭

救 済

フランススは常にこういつていた。

「施物を盗むようなことになってはいけない。自分が生きる上に必要なものよりも余計に貰い、余計に使用することは施物を盗むことになるのだ。」

だからわたくしは出来るだけ僅かの施物を貰うようにしている。そうでないとより貧しい人の分を欺して取ることになるから」と。

ある日彼が寺へ帰る途中一人の貧しい人に遭った。彼は躊躇なく立ち止って

「わたしはこの外套をその持主に返さなくてはならないのだ、わたくしたちがこの外套

を持っていてるのは私達より貧しい人にあうまで暫らく借りて着ていたまでのことだから」

こういつて彼は弟子に自分の外套をその人に与えるようにいった。

しかし弟子はこの外套がフランススに必要なことを知っていたので他人の為にそれ程まで自分を犠牲にしたり忘れてはならぬといった。

彼は答えていった

「わたくしは泥棒になろうと思っではいい。わたくしよりもっと必要を感じている人に譲らないなら泥棒と変らないのだから」

こういいながら彼は手づから外套をその貧しい人に与えた。聖者としての美しい彼を見

出すことが出来る。又真の赤裸々なヒューマニズムのあふれていることをそこにひしひしと感ずる。

それにしてもこうした単純に思われるような彼の考えを実現することは今日のわれわれにとつては困難なことであろう。しかし困難だからといつて諦めるべきであろうか、あくまで最善の努力を払つてその境地に進むべきか。いうまでもなく努力すべきであろう。ところが素直にこの努力をなしえないところに現代人の醒めた反省の苦しみがある。

何故ならそれを行う程自らにとつて余裕がないからである。という程今日の生存競争は激しい。より貧しいものばかりであるから。勿論これは全部ではない。あるところにはうんとあるのである。搾れるだけ搾つてうんと快樂に耽つてゐる人はたくさんある。しかしその人の心にフランススの精神が欠けているだけである。他人の苦しみなどどうでもよい自分さえもうかれればよいという考えこそ恐ろしいのである。

今かりにそうした人々が進んでフランススの精神に生きたならばどれ程社会が明るく、

良くなるか知れない。それは火を見るより明らかかなことである。

常にただテェク（取る）一辺倒の人々を除いてギブ（与える）一辺倒の人々に今日の矛盾の苦しみがある。即ち与うべくして与え、奪うべくして奪う現代の精神に醒めて苦しむ処がある。

精神喪失

百年も前にある遠い島に二人の富裕な農夫が住んでいた。彼らは二人で百一疋の羊を所有していた。だから常に近隣の貧しい人々から羨まれいた。

そうして永い間無事にすんできたがとうとう或日二人は喧嘩をしてしまった。その結果共有の羊を分配することになった。

ところが羊を分けるのに問題が起つた。勿論百疋を分けるのには文句はなかった。二人は夫々五十疋ずつ取つたが、一疋という奇数が、どうしても分けることが出来なかった。

いろいろの案が申し出されたがいかにして一致しなかつたので兎に角その一疋は再び二人の共有ということにした。

或る時一人の方のものが羊毛が欲しいから

剪りたいといい出したが、他の一人はその必要を認めなかつた。止むなくその羊の一方だけを認めなかつた。止むなくその羊の一方だけを剪り、他の半分側はそのままに残しておくことになった。

ところが数日たつてからのことである。不幸なことにその羊が溝へ落ちて死んでしまつた。

そこで問題はますます紛糾した。羊毛を剪らなかつた一方のものは毛を剪らなかつたらいい出した。

又他の一人はもし片側の毛が剪つてあれば、平均を失つて溝へなど落ちはしなかつたのだといい張つた。

遂にこれが訴訟になり、そのため随分費用がかさんで二人は一文なしになつてしまつた。

今日はいろいろの面で醜い争いが行われているが、二人の農夫以上に意地張りが強く、それ程まで無理して争うほどのことでもないのに全くもつてナンセンスな争いだから処置が悪い。

勿論どちらがよい、悪いというのでもな

い。又それによつてすべての尊い資材や財産を失うことが悪いのでもない。

問題は正義は争いだと称して、そのことにすべてを打込み精神のすべてを失うのは全ての損失よりも恐るべきことに外ならぬ。

世界の二大対立と称するものも、結局そのことに於てわれわれが憂慮するのである。いづれの是非ではなく、つまらぬ意地張りや強情さが健全な人間を自殺させることが恐ろしいのである。

さりとてこうした損失を払つた訴訟（戦争）に対して誰が正しい判決を下すことができるであろうか。はた又誰が永久に変わらざる正義をその間に確立しうるであろうか。

正義という名の争いのもたらず終結がそうした不幸事を招くことは、極力人間のもつ能力に於て解決しなくてはならぬ。世界はすべて全人類の共有であつて、どこが俺のもの、君のものということはない。又たとえそこに端数が出て、それを争奪する権利と理由はない。世界は一つである。一つのものをとり合うことほど愚かな馬鹿げたことはない。

誘惑の魅力

むかし奥山のふもとに山鶏の王が住み五百の家来をもつていた

身は純白で鶏冠は真紅に輝いていた。そしていつも家来の山鶏達に説き戒め世間の村落などに近ずいてはいけないといつていた。

「村里から常に遠く離れておれ、われわれは怨嫉をうけている。いつ誰にくわれるかも知れない。各自慎んで我が身を護るようにせよ。」

これがいつも与えていた訓戒の趣旨であつた。

その頃村落に一匹の猫がいた。狡猾でいろいろな鳥を餌にして生きておつた。

或る時山の麓に鶏群のあることを聞き喜び勇んで樹下にいき、まことにやさしい声を出して鶏王にいった。

「あなたの体はみるもすばらしい。純白、鶏冠は真紅、更に体つきは端正でまことに愛らしい。どうかわたしの夫となり、わたくしを妻にして下さい。どういう御用もいたします。そして一生を安穩、決楽に過ごしましう。」

しかし鶏王はこの策謀を見抜いていた。高

らかに声をあげていった。

「猫は黄眼の愚小物、事にふれて害心をいだき我等をくらわんとす。この婦の如きもの来らば寿命安穩の道あることなし」

こう喝破されては如何とも出来ず猫は二の句も告げず去つていった。鶏群はこれで安泰を保つことが出来た。

世尊はその時の山鶏王、猫は提婆達多であつた。こうして世尊は誘惑のおそろべきことを教えられている。

今日われわれは真の平和精神と自分自身を清める精神の目標を堅持して、全人類願望の大願を果す時である。

過去の誤謬を修正し、真理擁護に薄弱であつたことを反省し、正しい歴史を創造することには不熱心であつてはならぬ。勿論俗世間的村落の権威争奪の渦中に巻きこまれてはいけない。

しかし狡猾策謀に富んだ猫がいなくても限らぬ。実に提婆達多の邪義が全滅しているとはいえない。よくよく注意すべきである。

最近とみに反動地下策動の疑惑さえ懷かれる。たとえそれが意識的なものではないにし

ても長年にわたつてたたき込まれた訓育の余波として、知らず知らず反動化、非民主化の傾向に進んでいくのである。いわゆる逆コースといわれるものはその典型なのである。

常に細心の注意をしていないとどんな反動の誘惑が、どこから出てくるとも限らない。しかし難局になると、どんな人も一寸した誘惑にのせられ易い。

特に青年は今日の難かしい生活不安の脅威から脱却したい欲望から、狡猾な猫の口車に誘われてとんでもない不幸を招くし、ややもすると尊い生命すら失いかねる事になる。

無知の危険

山間未開の地方から徴用され、従軍した青年があつた。激戦中にも怪我一つ負わず生残ることが出来た。ところが生き残つたのを幸いにして戦死者のポケットをさぐつてみると時計がみつかった。

はじめてみた文明の精器である。かすかに音をたて乍ら針の廻るのを見ると何ともいえず嬉しい気持で一杯になつた。

まるで子供のように耳のそばえ持つていたり、じつと目の前に出して針の動くのを見

乍らやがて引上げて来た。

夕方になつてみるとどうしたことか全然音がしない。目の前え出してみても針は動かない勿論ネヂをかけるなどということを知つてゐるわけがない。

上へ上げてみたり、振つてみたりしたがどうしても動かない。こうなつてはもう折角の文明の精器も駄目だと失望していた。

ところがたまたま行きあつた人にみせるとその人が幸いにも時計屋であつた。

「なんならわけていただいても結構ですよ」と時計屋がいつたので「どうせこんなものは死んでしまつてゐるのだから死骸を売って金になる位いなら」といつて安く売り払つて喜んでゐた。

いうまでもなく商人は喜こんだ。ネヂをかけるだけで立派な時計が安く買えたからである。無知が損害であり、恥であり、笑われるものであるということである。

しかしこれはひとり山間未開地の青年のみのことではない。大都会、大産業の中心地において威張りちらしている指導者たちの間にも同じことが繰返されている。こんどの戦争な

どもそのよき例に外ならない。外国について余りにも知らなすぎたことが原因してゐるとさえいえるからである。

今我国は国際社会に於て、独立国として産業的にも、思想的にも自立することが強く望まれてゐる。勿論それが出来れば我国の損失ではなく累を全世界にさえも及ぼす。にも拘らず正しい産業も教養も共に停頓状態である。否むし後退的でさえあるといえよう。ネヂがゆるんで止つた時計である。くるつてゐるのではない。政府というところにいる人々がみなネヂのかけ方を知らないのである。だから増々ふえつつある人口はみな働くのを嫌つてゐるのではないのにその人々に対して働く意志なるものを動かすだけのネヂのかけ方を知らないのである。

喜こんで働こうにも熱意を出して働けない政策や手本を示してゐるからである。

くだらない争政や利権争いや闇取引やトバクや又張り切つて機械の動き出す力が指導者の中心部に欠けてゐる。

たまたま動き出したからと思ふと特需景氣にあふられてのことである。それに伴つて株

などというものがとてつもなく変動をみて、好景氣を示すのだからたまらない。それがどういふことのために起つたか、どういう目的をもつかについては皆目知らないし、頓着がない。

だから山間の青年のようにだめになつてしまつたからと安く売つてしまふのである。これで自立が出来たり、自主が生れたりすれば全く夢物語である。

ネヂの中心部ともいふものは復興の熱意と良心とである。打算を離れた純潔な人間精神乃至道德の活力によつて立ち上るより外に道はない。

今日の政治家は、往々にして我国を死んだ時計として安売りするかわからぬ程どたん場に来てゐる。

しかし時計とは違つて買手もないという難局になるかも知れない。

無知は恥であるばかりでなく罪惡でさえある。

大衆に於ても又同様である。無知の故にいろいろの不合理に甘んじなくてはならぬから。

模倣は命を断つ

造物主（梵天）に一人の弟子があった。その弟子は師匠が天地を創造されることを羨しがって我も又世界を創造したいといい出した。

梵天はこれを聞いて

「お前は、そんなことを考えてはいけな
い、お前には到底作ることとは出来ないか
ら。」

と戒められた。

天地の創造にはそれに堪えうる原理と能力
とが備っていないからである。

ところがこの弟子はそうした師匠の教誡に
従わず無理矢理に強引な創造の企てを実行し
てしまった。

出来上ったものをみて梵天は叱り且つまた
冷笑していった。

「お前の造ったものはばかに頭が大き過
ぎて、支えているくびは逆にまた、とて
つもなく小さいじゃないか。手を造った
にしてはすごく大きいし、臂は目茶苦茶
に細い。脚は又えらく小さいのに踵とき
たら頗る大きい。お化みたいな鬼みたい

で決して自然の姿ではない」

これが歪曲せる創造の概評であった。

仏は八正道の純正な理論も理解せずに、い
ろいろそれに似せて外道が多く、教義を偽作
するの、不格好を論難されている。

四諦の理にもとずき実践の聖行を樹立すべ
きであるのに形だけを模倣して民衆を惑す邪
道を警戒されているのである。

すべて創造にしても建設にしても基本的原
則に立たねば真の生命は生れてこない。

民主主義体制が希望されているからといっ
て形だけの民主形態を案出してみたり、自由
尊重が大勢であるからといって、見えばかり
の衣装を繕ってみたところで所詮「合せもの
離れもの」である。

「この辺のところではいかゞでしょうか」

などと世界精神の鼻息を伺ってみるといふよ
うな卑屈な態度では新らしい独立も出発も又
幸福な平和もあろう筈がない。

外見ばかりの模倣で同時に内容の實質が現
出したり、充されるのなら問題は全くない。
外面ばかりで出来ないなればこそ常に問題が
あるのである。

やはりもっと本質にふれ、従うべき原理を
見究めることが重要なのである。

女性の方々でよく服装のことが論ぜられる
が、徒らな模倣は自らの個性を殺すのみなら
ず、社会の人々の感情をすら害する場合が非
常に多い。

創造には創造の原理があり、それには生き
た生命がある。しかし模倣の原理では断じて
創造は生れるものではない。むしろ創造の尊
い生命をすら破壊してしまふ危険すらあると
いわねばならない。恐るべきは盲目的な模倣
の精神である。

又、我々は造り出すことと発見とは異なる
ことを心しなければならぬ。東洋人はとか
く発見・発見はしても、それをもっとよいも
のに工夫する点が欠けていると云われる。模
倣と創造が違ふように、この事も命を断つ一
つになりかねない。

×

×

×

×

×

×

新編 百 喻 經 (5)

一三 自分を知らない

昔の小話に

×「人間は、勘忍の二字が、たいせつだ」

といえ、そばにいた無筆の男、「かんに」と指を折って、かぞえていたが、

男「そんなことをいっても、かんにんでは、四字になる」

×「いやいや、勘忍の二字だ」

男「いや、四字だ」

といえ、×腹をたてて

×「きさまのような、無筆にはわからな
い、勘忍は二字なのだ馬鹿……」

と、となりつけた。

どうも理論家は、実際にうとく、無筆と
経蔑される人々の方に、實際家があるよう
だ。

一四 政略のために

太田道灌は、上杉定正の臣、扇谷上杉氏の執事とし、その柱石となり、扇谷上杉氏の為に、よくその勢力を保っていたが、上杉顕定と定正の間に、勢力争が起るに及び、顕定は、道灌の存在が恐しかったので、策を行い、定正にすすめて、道灌を討たしめた。

定正、愚かにも、この計にかかって、文明十八年、糟屋の館に於て、道灌を刺殺した。

定正は、赤い舌を出して

「してやったり」

と喜こんだ。

道灌を失って後の扇谷上杉は、日毎に勢力が墮ちていった。

自分のためのパイロットに対し、信頼を失うことは、自分の針路を危険に墮すものだ。

一五 言葉の魔力

ある銀行の広告に、「月収百倍貯蓄論」

というのがある。

毎月月収の二割、そしてボーナス月は一ヶ月分を預金して、これを、十年間つづけるもので、十ヶ年後は、月収の百倍の、預金ができる、というのが、その方法らしいが、毎月つづけて十ヶ年間、複利計算でいけば、現給の百倍程度になることは、あたりまえのことで、別に大した奇蹟でも無いのだが、こうした言葉できくと、チョイトすばらしい事のように、考えられる。是が、言葉の魔術とでもいうのか、統計の錯覚だ。

我々の生活の中には、言葉の云い廻しや、テクニクで、奇蹟らしく感じられるものがある。

新興宗教や、精神科学とか、道徳科学、とか名付けた、宗教的な集りの中には、此の言葉の魔術が巧に扱はれている。

(伊東孝位)

ねり
練

く
供

よう
養

と 団 扇 ま き



中 村 康 隆

☆

月遅れの五月にも花まつりの風景は各地に見られるが、この祭りに限らず、諸寺院の大きな記念行事、例えば落慶式や晋山式、祖師や開山などの遠忌といった特別法要の際にも、きまったように稚児行列（天竜供養）が催されるようである。

仏教ばかりか、大きな神社関係の祭礼でも近頃はよくお稚児さんが出る。明治以後神仏は分離され混淆時代（こんこう）の実際は忘れられて来ているが、稚児行列だけは習合時代に逆戻りといった形である。

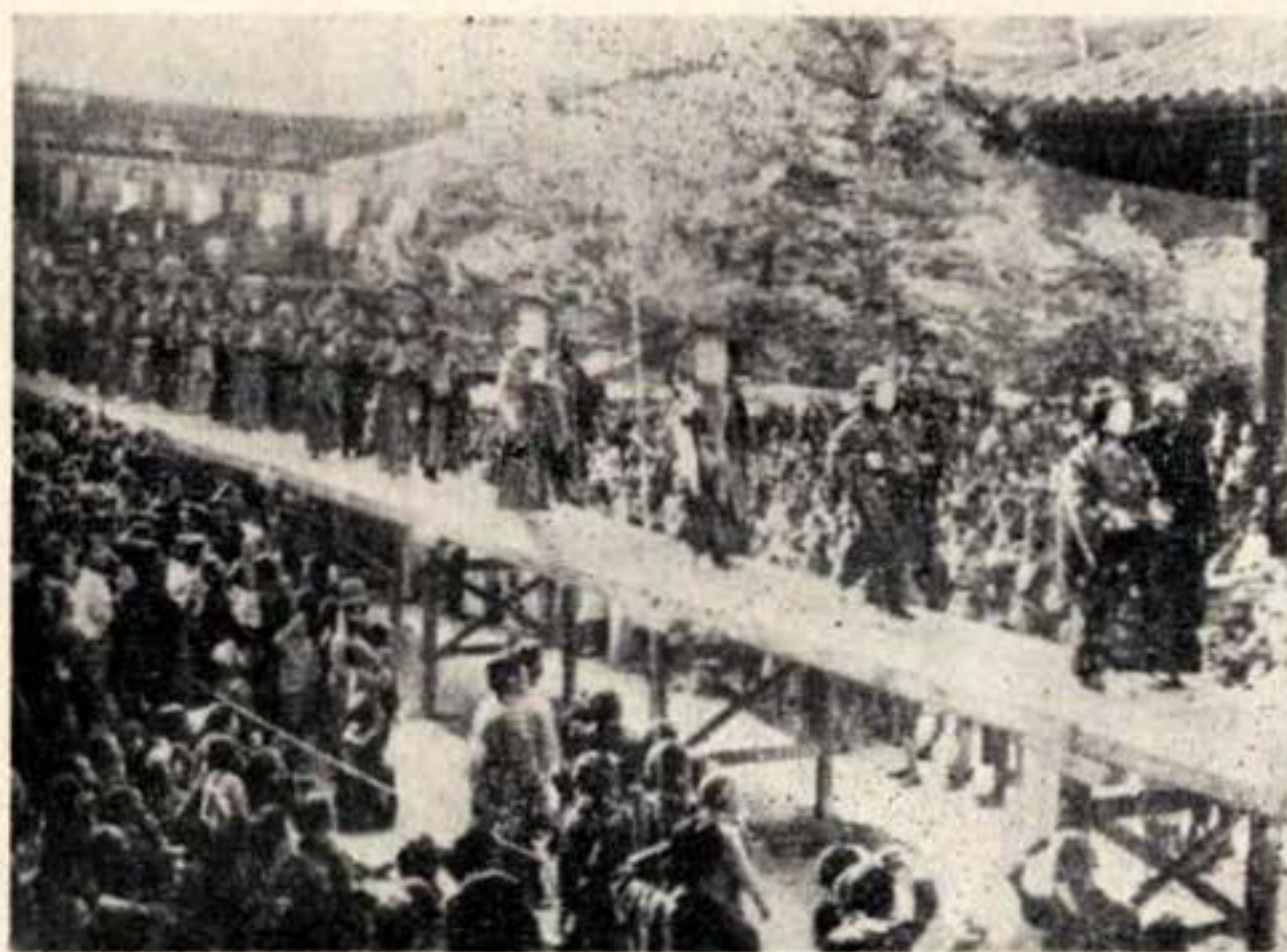
大きな法要や祭典に稚児行列の歓迎されるのは、単に華やかな彩りを添えて祭りのにぎやかしになるといっただけの意味合いからでもなさそうである。

勿論、かわいいわが子に一度はキラビやかな稚児装束をつけさせたいという親心とくに母親の願望を満たすため比較的楽な勧募が出来るからにもようが、また稚児につけばたっしやになるといわれるので、わが子安らかなれと願う親心からこの催しが歓迎されるという理由もあるであろう。そうした動きのほかに、もともと氏神の祭礼などに幼童たちは小若連として踊りやはやしやお神輿（みこし）などに直接たずさわる習わしの多いことも、一つの宗教的な底流として

うけとられているからだといえないこともないであろう。

俗に「七つ前は神の子」とかいって、日本では幼童たちが神様の代りともなり、祭りの中心ともなったためしは多かったのである。五月六日に行われる愛知県稲沢市^{おおくにたま}大国霊神社の梅酒盛神事^{うめさかもりしんず}（梅の実や酒を神に献供する）では、神の渡御に七八才の少年が神職家から神くじで選ばれ、神代（神のよりまし）と称されて神様の代りに練り歩くという。天理市石上神社の渡御祭（十月十五日）では頭屋^{とうや}に選ばれた稚児が神のよりしろの幣を持つという。高知市一宮の土佐神社の祭（十月八日）には神に扮した童児が馬の上で居眠りしながら神社に参るそうで、つまり神がかりの失神状態を示すものと考えられている。そういえば、神が居眠りして馬から落ち畑作物などで眼をついたとか怪我をしたとかでその作物を作らないといった伝承の多いのもこうした風習を反映するものといえそうである。

御^お一つ物^{ひともの}と呼ばれる乗馬の稚児のお練りももとは神のお練りを示す憑童（よりましわらわ）として笹薄芦などを手に持ったり腰にさしたりしたもので、それがいつの間にか時代装束の風流行事となったものである。昔平泉中尊寺の祭にも御一つ馬^{おひとうま}といって七才の童児が牡丹の花を持ち芦の葉を腰に差して神馬に乗って練ったという。



当麻寺の練供養

天人・地蔵・龍樹・廿五菩薩の順で行列

こうしてみると、大晦日や小正月、七夕、月見、亥子^{いのこ}などの晩に子どもたちが群^{むれ}をくんで家々を訪れては供物を貰い歩いたり、正月飾りを集めてトンド焼きしたり、鳥追い、虫送り、亥子突きなどするものも、これまで考えられていたように、「祭儀の童戯化」というよりも、むしろ神々としての童児の神聖な行事の残存と見た方がよいようである。

もと
もと稚
児のチ
は、神
社建築
の千木^{ちぎ}
と同じ
で聖な
るとい
う意味
なので
あった
それで
愛知県
北設楽^{きたせつらく}

郡設楽町三都橋部落の津島神社の十一月十七日の霜月祭は参候祭といわれるが、祭の始めに当って山上の観音堂から観音様の御輿が津島様まで渡るが、それは部落から特に選ばれた少女が観音様に扮して乗っており、これを千子と呼び、輿の上で千子舞を舞ったりするが、当て字でない訳は理解できよう。

☆

仏教の稚児行列は一に天童供養と呼ぶように、神なる童児が仏徳讃仰のため行道し舞樂し供養する形をとっているところが、日本固有のヨリマシワラワ（憑童）の形と異なる点であり、これは仏をもって人天（人間と神）の上におく仏教の立場からも当然といえよう。そこで、仏の供養のために練り歩くというところから、一に練供養とも呼ばれているが、もっと広くは行道という法儀式の一つというところとが出来る。それは転経行道、散華行道など本尊を中心の内陣又は堂中を右旋して誦経讃唄し散華して歩くところの、仏を讃仰敬礼する経行（またはキンヒン）に端を発し、その特に屋外を行列して歩くものを練供養と称したのである。

この練供養には（一）稚児行列のほかに、（二）伎楽系統の行道と（三）浄土教系の二十五菩薩練供養とがあり、後者は古い伎

楽系行道の借用改変と考えてよいだろう。

☆

伎楽または呉楽は日本書紀卷第二十二推古天皇二十年の条に「百済の人味摩之飯化て曰えらく、呉に学びて伎楽舞を得たりと。則ち桜井に安置して少年を集めて伎楽舞を習わしむ」とあり、また聖徳太子伝暦卷下に「三宝を供養するに諸蕃楽を用う」とあるもので、延喜式によると、四月八日、七月十五日の灌仏及び盂蘭盆の両齋会には伎楽人を東西二寺に分たという。そして七八世紀頃の大寺の法会には盛んに行われたが、九世紀頃から舞樂（雅樂）の流行につれて衰え、遂に絶えてしまったが、幸にも当時の仮面は法隆寺や東大寺や正倉院などに二百面近くも残されており、正倉院には楽器や衣裳もいくらか残っている上に、伯近真の教訓妙などに記録もあるので、その大略は想像出来る。多く寺の境内など屋外の広場で催され、笛、腰鼓、銅鈸などを鳴らし、獅子・治道・呉公・金剛・迦楼羅・崑崙・呉女・力士・大孤・波羅門・醉胡など、およそ十一種類の仮面（大きく後頭部までスッポリおおるのが特色）をかぶって、おどけた踊りや所作をまじえながら歩いたらしい。この伎楽は呉の民間楽だが、それに代ったのが八世紀頃伝わった唐の宮廷楽の舞樂または雅樂である。楽器も舞

も豊富で洗練されていたから次第に重用され、新作物も出来て、今日まで宮中やその他法隆寺・四天王寺の聖靈会や、春日神社・厳島神社の大祭などにも伝えられており、笙・箏などの楽は多くの社寺の祭典や法要によく用いられているところである。しかし、この舞楽は舞台上の演舞であって、練り歩くものではなかったので、やはり八世紀頃大陸から伝えられた行道面と呼ばれる種類の仮面が、屋外の行道即ち練供養の行列に用いられるようになった。行道面は十世紀から十四世紀にかけての作品が、今日もなを法隆寺（八部衆面）や京都の教王護国寺（十二天面及び八部衆面）に残されている。その遺風は今日でも法隆寺の聖靈会（俗にお会式）などに見られる。四天王寺聖靈会は二月廿五日だが、法隆寺では月遅れの三月廿二日から廿四日にかけて行われる聖徳太子のみ魂祭りたままつで、聖徳太子の像と舍利とを乗せた輿を天・竜・夜叉・阿修羅等の八部衆が荷輿丁おもひようぢとなって担いで伎楽同様獅子子ししこにひきいられた雌雄二頭の獅子や菩薩を先頭にして、一山の僧侶たちにまもられて、東院から渡御する長い行列で、奈良時代からの古い伝統のある行道である。法隆寺行道面中には追儼面も残され、西円堂の修二会（二月一日～三日）の終りに催される追儼会俗に鬼追いの儀式にはこの面を被った黒・青・赤の

親子の三鬼と毘沙門天が出るが、つまりは貧瞋痴の三煩惱の追放を意味するとされるが、こうした鬼追い行事は、薬師寺花会式（四月五日夜）や静岡県島田在千葉山智満寺修正会（旧正月七日夜）などに、今なを古式豊かに残されている。この行道面にはもと高野山天野社の二十八部衆面が国立博物館に蔵されている。

こうして行道面には、菩薩面も交えるが、天部の八部衆・十二天・二十八部衆等仏徳崇敬を示す神々の像をあらわすものが主であり、ここにも仏本神迹の思想的立場の一端がうかがえるようである。

☆

ところで、前述の法隆寺菩薩面の裏には、「康和四年十月九日、仏師増善、対法隆寺造観音面形、来迎料」と銘が墨書され、外にも十四世紀頃の種類の菩薩面七面もあるから、かつては法隆寺でも来迎会がかなり永い間に亘って行われていたことを物語っている。同様な菩薩面は東大寺や手向山神社にも残っていて、やはり来迎会用といわれ、保元三年の在銘もあって、その頃南都での来迎会の盛行をしのばせてくれる。東大寺には法然上人の推挙で再興の大勧進となった俊乗房重源が特に来迎会用に作ったという鉦鉦が蔵されており、「東大寺末寺渡部浄土堂迎講鉦鉦五

之内。建久九年二月二日、大和尚南無阿弥陀仏」の刻銘がある。南無阿弥陀仏は重源の号である。

十世紀の頃から漸く盛んになった浄土教の信仰から、人々が往生浄土を願望し、藤原頼通が「極楽などのあらんようにしてこもりゐる」といわれる宇治平等院の結構とか、多くの来迎図や浄土変相図などの作画と共に、儀式の上でも聖衆来迎のさまを写し伝えようとした意欲を、われわれはこれらの面や鉦鉦などからうかがうことが出来よう。「本朝続文粹」にある保延二年三月廿三日の鳥羽勝光明院供養の敬白文によると、四面の扉には九品往生の迎摂儀式の図絵が画かれていたということである。

☆

日本に於ける来迎会もしくは迎講の始まりは古来恵心僧都の創案と伝えられる。東大寺雑集録別冊二十五菩薩迎講法会濫觴にも、源信が二十五菩薩の面を彫刻して横川の華台院で始め、ついで寛仁供奉がそれを見ならって丹後迎講を天の橋立で行い始めたことを記している。中右記の天仁元年の条には永観律師が東山で迎講をおこなった由が見え、東鑑には安貞三年二月二十一日彼岸の初日に走湯山の浄蓮房が駿河の前司の請によって三崎の海上に十余艘の船を浮べて来迎会をおこなったことが見えている。

いまこれらの歴史的な話を述べる暇はないが、こうした迎講の興行は今日でもなを各地に目のあたり眺むることが出来るので、深い浄土教的教旨を現わそうとした一種のページェントといえるであろう。

迎講は多くは来迎会または廿五菩薩来迎会とか菩薩練道とかいい一般には練供養と呼ばれている。生駒の矢田寺や八尾の常光寺の練供養は四月廿三日、伯耆の大伝寺の九品会式は旧三月十四五両日というが、備前の弘法寺（五月五日）大阪の大念仏寺（阿弥陀経万部大法要会練供養、五月四・十日）大和の久米寺（五月八日）播磨の太山寺（五月十二日）京都の東寺（五月十四日）大和の当麻寺（四月十四日、十八日）など、五月に行われるところが多い。俗にお面かぶりといわれる東京奥沢九品仏では四年目の八月十六、七両日に行われている。そのほか、信州小諸の十念寺、近江の常楽寺、京都の泉涌寺即成院、神戸の藤之寺、美作の誕生寺、菩提寺等練供養をする所が多い。前にも記したように、愛知県説楽の参候祭には観音に扮した千子が出るが、静岡県水窪観音堂では六観音の行道がある。しかし、この来迎会こそ一層大きな規模をもった純宗教的な野外劇と呼ぶことが出来よう。

ここでは当麻寺の練供養について略記しよう。もとは中

將姫の忌日三月十四日だったのがいつか（江戸期、元禄の文書あり）四月になり、陽暦になって五月十四日となった。

この寺は真言・浄土両宗の寺だが、行事は浄土宗寺院の主催で真言側は証明師となって楽席に着いて協力する。

地元の部落ではこの日をレントまたはレンゾ（レンザとも）といって仕事休みにして終日役にあたるという。レントは練道から来ているともいわれ、久米や矢田の練供養の日も、法隆寺のお会式の日も、その近くではレンゾになっている。レンゾは連座の転ともいう。

岡山牛窓町千手せんずの弘法寺では面をかぶるのは千手の男子に限られているというが、当麻では古くから菩薩講があつて（元禄期の講員名簿がある）現在約百五十人、地元及び大和各地にわたっている。面一つについて五人なり十人なりで一組となり、村中で一組の場合もあるが、都合二十五組で、順番を早める意味で欠員が出来ても仲々補充しないという。講員はおはつぽ（米一升・麦一升）を出す、欠員分は各自負担となる。講の一組は山内の中坊にあるので、もとは各坊それぞれ所属の組があったといわれるが、いまは菩薩面を蔵している護念院に属している。そして観音勢至普賢三体の面をかぶるのは当麻の村人に限られており、観音は北川家、勢至は村井家にきまっている。そして

五月十八日には練りどめといってこの三体だけで護念院の本堂で来迎和讃にあわせて十四日同様のお練りがある。

十四日当日は講中は朝から護念院に集まって面を授かり装束をつけにかかる。面は廿五菩薩と竜樹、天人二計廿八人分で、午後二時頃には護念院の本堂に整列をし、住職が導師となって法要ののち、中将姫法如の寿像が輿に移され白丁によってかつがれて曼陀羅堂（本堂）に遷座され、菩薩衆もこれに続く。堂内には一山大衆が待ち受け壮重な法要がある。やがて四時頃、練供養の始まりを告げる一番鐘を合図に、山内の群衆の待ち仰ぐなかを、一人の僧に先導され少数の信者につき添われて法如の輿が渡橋をわたって娑婆堂に下る。人々の口からは自然と念仏の聲が高まる。第二の鐘で、今まで堂内にいた真言宗侶は本堂向って右側の椽側の楽席につく。三番鐘で浄土側寺院（奥院、護念院、念仏院）が壮嚴服朱傘で娑婆堂に渡り、四番鐘で、僧侶・天人二・地藏・竜樹・聖衆・観音・勢至・普賢の順で観音（すくい仏ほとけ）は蓮台を捧げ、勢至（拝み仏おがほとけ）は合掌し、普賢は天笠をかかげて、お練りをしながら娑婆堂に向い、当麻節と呼ばれる特異な節廻しで来迎和讃の唱えられ、うち、娑婆堂内についた観音は法如像の背後から胎内仏たる一小像（勢至）をとり出して蓮台に乗せ、また大悲の

み手をのべて往生人たちの頭べを撫でて救いとる所作をして、今度は観音が先頭に立ち、勢至・普賢・地藏・竜樹・諸菩薩・天人の順でお練りをしながら、極楽界に比される曼陀羅堂に引接してゆく。もとは内陣の弥陀如来立像がこの時橋のたもとまで来迎されたというが、今は行わない。最後に娑婆堂での法要を終えた浄土宗侶が列を追ひ、法如像を乗せた輿（なきがらに模す）が後からゆく。こうして真言側の席から奏される楽の音の内に一同が曼陀羅堂に迎えられ終ると、練供養の法儀も終るといふ訳だが、講中はそのままとの護念院にひきあげて一往の儀礼があつてお開きとなるという。

奥沢の九品仏では本堂と上品堂との間に来迎橋がかけられ（これを白道と呼ぶ）善の綱が本堂の釈迦仏と上品堂三仏の御手の間にひかれ、来迎は上品堂から本堂にとなされるが最後は還相を示すとしてまた本堂に皈る。ここでは先頭に花籠（まんどう）が捧げられ、また中将姫同様開山珂碩上人の厨子が加わっている。善の綱は安産、厄除けの守りとして腹帯に乞われて分っている。

小諸の十念寺では来迎橋の下に黒白の悪魔が潜んで宝蓮台で担がれてゆく行者を落そうとする所作を加えていたという。

☆

千葉県匝瑳郡南条村広済寺の鬼来迎は鬼舞ともよばれ、地獄で亡者が鬼に責められ遂に地藏に救いとられるまでを御詠歌につれてする旧七月十六日の仮面黙劇で、菩薩、閻魔王、俱生神、三途河姥、鬼などが出る。これは修正会などの鬼追い劇と同類のもので、来迎会とは異なるので附記するに止めたい。そのほか菩薩仮装の宗教劇や舞踊などは例えば隠岐西郷町国分寺や福井糸崎寺の例など数も多いが、いまは行道形式の三つの類型について記すことに止めたい。

☆

奈良の五月は美しく寺々にも薪能を始め色々な行事が多いが、なんかづく五月十九日の唐招提寺梵網会は団扇まきの行事でにぎやかである。寺伝によると律宗の祖である開山鑒真和尚が戒律を守って夏期端座中蛇蚊に食われるのを弟子が団扇で払おうとしたのをとめたとの故事から、その忌日に中宮寺や法華寺の尼僧らが手作りの団扇を供えたところ、いつの間にかこの団扇をお守りにすると諸願成就すると信ぜれて乞うものがふえたので、梵網会のあとで鼓楼から参詣の人々にまくことにしたという。団扇は唐団扇形、紙張で梵字を書き赤青紙の飾りがあり如意宝扇と呼ばれて

いる。

一体団扇は災厄を払い福を招く力があるとされたので、福団扇として祭事に用いられる例がある。愛知県新城町しんじょうの念仏踊り（ほうか）では紋所を画いた大きな団扇を背負い、太鼓を打ちながら社寺や新盆の家などを巡回して和讃・念仏を唱えながら踊る。大阪の住吉踊も長柄の傘のまわりを団扇を振りながら僧形の少女たちが踊りはねる念仏踊の一種だし、熊本山鹿市の万行踊まんぎやうりも雨乞踊とされてはいるが瓢箪と団扇を持ち鉦太鼓かねを鳴らして踊りはねる念仏踊りである。扇があらゆる舞につきものになっているのも、一つにはこうした災わざわいを払い福を招くとの意味から出ているのである。長瀬の宝登山神社がPRをかねて福団扇を出しているのも同じことである。唐招提寺の宝扇は民俗的にはこうした習俗の上になりたっているともみてよいであろう。

（未完）

（筆者 大正大学講師）

（童）（心）（仏）（心）

おかわいそうに

空は気持よく晴れ渡っている。ラッシュアワーの殺人電車の中から、かろうじて首を回して窓外を見ると、新緑の道を登校する子等の伸び伸びとした姿が、今日の青空にいかにもふさわしい。

ところが、車内にも通学する児童が大勢乗っているが、殺人電車のこととて、大人の間にはさまって帽子は曲り、ランドセルはいびつになり、まったく青息吐息の登校である。地域外入学か、有名校への親の犠牲か知らないが、誠に「おかわいそうに」と言いたい。

乗車する行列に、これも親から教育されたのか、子供だからという特権意識をもって電車が停車すると、大人達を押しつけて、先に飛び乗り、行列など無視する通学児童。しかも、このようにエネルギーを消耗して、やっとたどりついた学校の校庭は、完全にコンクリートが敷きつめられて、土の香りがするのは、小さな草花の鉢の中だけ。

これらの児童のために、いえ、そんな学校を選んだ親のために、「おかわいそうに」と私は言いたい。（輝）

会員だより

私のお寺では明年にひかえた法然上人七百五十年御忌の法要をつとめました。

貴誌が法然人讃仰の趣旨で毎月御努力下さっていることに御礼を申し上げます。

つきましては、私たちに分る仏の道をお説き下さると共に私達が信仰生活を送って行く為の行事、作法の解説をお願いしたいと存じます。

ただ、こうすればいいんだ。ではなくその裏付となるものがあればもっともっと安心した生活が送れように感じますので筆を取りました。

右注文ばかりで恐縮ですが、私達の為に御努力下さるようお願い申し上げます。

金沢

時田寿夫

毎月「浄土」の来るのをたのしみにしております。

処が発行日が月により早かったり遅かったりで、私の期待を裏切ります。郵送でするので二三日のくるいはともかく、十日以上も違わないようにお願いしたいと存じます。すばらしい表紙に、その内容、是非期日発行をお願いします。

熊本

佐伯正純

春らしくなって参りました。新らしく連載になりました中村康隆先生の「仏教習俗覚書」は大変興味深く読ましていただきました。私達が受けついで行っている行事にも場所によってその行われ方が違い、一つ一つ意味をもっていることが分り今後は先祖から受けついでいる行事をもっと大切にしていかなければならないと思いました。一年を通じての解説は有意義な事と存じ、来月号よりの連載をたのしみにしております。

群馬

大脇 学

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

五月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年四月廿五日 印刷

昭和三十五年五月一日 発行

定価 五十円

編集人

村 瀬 秀 雄

発行人

佐 藤 密 雄

印刷人

神 谷 秀 雄

印刷所

神谷印刷株式会社

発行所

法然上人讃仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二一八七番

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に
お一人でも多くの会員をつくって、正しい
信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめて下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利
用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

浄土宗日常勤行式

発売中

○定価 一部金三十五円

十部以上（一部につき三二円）

百部以上（一部につき三〇円）

送料実費

○オフセット・美麗折本（香沢梵成師名筆）

内容（和讃勤式付）（吉田定久訳）

△香偈 △三奉礼 △三奉請 △歎仏偈 △懺悔偈 △三尊礼
△開經偈 △四誓偈 △本誓偈 △一枚起請文 △撰益偈
△念仏一会 △別回向偈 △総回向偈 △四弘誓願偈 △三身
礼 △送仏偈

東京都港区芝公園十九号地浄土宗務所内

申込先

浄土宗教化団中央本部

振替東京六一九三九番

電話芝(431)一三八二番

△新刊のお知らせ▽

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価 七十円

若き人ひとにおくる佛教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

△既刊（在庫僅少）▽

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm～85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm～51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田